

正しく動き、美しくつながり、強く創り出す「未来を生き抜く力」を育成する学校



「たい」のあられる時津小



↑こちらからも↑

令和7年 2月 6日（木） 発行人：校長 森内 秀学

郷土愛の育成は、地域の方々と一緒に

故郷を大切に思う気持ち、「郷土愛」。故郷は、離れて初めて、その大切さや、自分の人格形成に与えた影響の大きさに、気付くことが多いものです。

しかし、離れてからそのことに気付き、懐かしんだり、恩返しをしようと考えたりするには、子どもの頃に故郷に住んでいた「地域の方々」と、かかわったり、つながったりした経験が欠かせないのではないのでしょうか。

そこで、子どもたちの郷土愛の育成に一肌脱ごうと、元村二地区の節分の豆まきに、本校職員7名も参加することにしました。2班で約30件ずつ、口上を述べ、役割を演じながら2時間近くかけて家々を回るといふ、40年近く続いている地域行事です。



時々、子どもたちの自宅に訪問する機会がありましたが、職員を見つけるや否や、神妙な顔で対応していた子どもたちが、一気に笑顔になっていたのが印象的でした。

参加した職員は、こんな行事が続けている地域が町内にもあることに、大変驚いていました。ご高齢のお世話役の方からは、「役を代わって歩いてもらって助かりました。」と喜んでいただきました。また、訪問先の100歳の方からは、「よう来なった！」とおもてなしまで受けました。おかげさまで、みんなが喜ぶ1日になったな、と思いました。そして、「学校の教職員」がもっている「地域を盛り上げる力」というのは大きいと思いました。

報道で目にされているように、「学校の教職員」というのは、持ち帰り仕事も多く、なかなか大変です。ですから、見守り活動や登校しぶりの子どもへの対応など、以前は「学校の教職員」がやっていたようなことに、地域の方の力を借りることも増えてきました。

しかし、地域は地域で、お世話役の方が高齢化し、行事が続けていくことが困難になってきました。今回、そこに「学校の教職員」が少し力を貸すことで、まだまだ地域は息を吹き返し、盛り上がっていくことができるのではないかと、と思いました。そして、そうなることで、子どもたちは一層、郷土愛を育むことができるのではないかと、と思いました。

地域と学校がタッグを組むと、みんなが喜ぶ素敵な社会をつくれそうな気がします。